

母親のネガティブな被養育経験が子育てに及ぼす影響: 克服へのプロセスに注目して

著者	千? 美恵
学位名	博士(心理学)
学位授与機関	白百合女子大学
学位授与年度	2018
学位授与番号	32627甲第60号
URL	http://id.nii.ac.jp/1630/00000021/

白百合女子大学 博士論文審査報告書

氏 名	千崎 美恵
学 位 の 種 類	博士（心理学）
学 位 記 番 号	甲第 60 号
学位授与年月日	平成 30 年 5 月 10 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	主 題 母親のネガティブな被養育経験が子育てに及ぼす影響 副 題 克服へのプロセスに注目して
論文審査委員	委員長 教授 岩政 伸治 主 査 教授 木部 則雄 副 査 教授 田島 信元 副 査 教授 秦野 悦子 副 査 教授 鈴木 忠

論文内容の要旨

育児困難感のリスク因子として、子どもの問題、親の問題、環境の問題がある (Belsky, 1984)。育てにくい子どもへの対応に親が困難を抱える場合とともに、親側の何らかの要因による不適切な養育態度が子どもの発達を妨げ、育てにくい子どもとなっている場合があり、育児困難感母子相互作用と密接に関連していると考えられる。親側の要因のひとつに被養育経験が挙げられる。不適切な養育の世代間連鎖によって生じる育児困難感に注目することが重要であると考えられる。本研究では、ネガティブな被養育経験を有する母親の特徴を捉え、不適切な養育の世代間連鎖について、および、克服への心理プロセスについて検討することを目的とした。さらに、支援のあり方について提案することを目指した。

研究 1 では、被養育経験の世代間連鎖と母親の愛着スタイル・虐待心性との関連を検討した。幼児を持つ母親 1257 名に対して質問紙調査を実施、775 名の有効回答を得た。ネガティブな被養育経験があり、現在不適切な養育態度がみられる母親を連鎖あり群、不適切な養育態度がみられない母親を連鎖なし群、ネガティブな被養育経験がなく、不適切な養育態度がみられる母親を不適切養育群、不適切な養育態度がみられない母親を安定養育群に分類し、被養育経験によって形成されると考えられる愛着スタイル、および、不適切な養育態度に影響を及ぼすと考えられる虐待心性 (西澤・屋内, 2006) について、各群の特徴を検討した。ネガティブな被養育経験がある母親は、安定養育群より有意に安定傾向が低く、ネガティブな被養育経験がない母親より有意に愛着スタイルの回避傾向が高かった。連鎖あり群は、ネガティブな被養育経験がない母親より有意にアンビバレント傾向が高かった。虐待心性において、連鎖あり群は他の 3 群と比較して有意に被害的認知が高かった。連鎖あり群と連鎖なし群で有意な差がみられた被害的認知が、ネガティブな被養育経験の連鎖の有無に関連していることが示唆された。また、被害的認知は、現在の養育態度と比較的高い相関が見られ、愛着スタイルのアンビバレント傾向と弱い相関がみられた。ネガティブな被養育経験があり、世代間連鎖が生じている母親は、アンビバレント傾向が高く、被害的認知が高い傾向にあることが示唆された。アンビバレント群の子どもたちは、子どもが親に援助を求めたとき、親が関わってくれるか、応答的であるか、援助的であるかということに対して不確かだと思っている (Bowlby, 1988)。そのような不適切な養育経験を受けて大人になり、その不安感を持ち続けている可能性があり、それが子どもに対する被害的認知に繋がって

いると考えられる。

研究 2 では、母親のネガティブな被養育経験が養育態度に及ぼす影響を検討した。共分散構造分析によって、母親のネガティブな被養育経験が不安定な愛着スタイルに影響を及ぼし、不安定な愛着スタイルが虐待心性に影響を及ぼし、虐待心性が母親の不適切な養育態度に影響を及ぼすというモデルが得られた。ネガティブな被養育経験を持つ母親の世代間連鎖を抑制するには、母親の愛着スタイルの特徴、および虐待心性の傾向に注目した支援の重要性が示唆された。

研究 3 では、ネガティブな被養育経験の連鎖を克服する母親の心理プロセス、および、要因について探索的に検討した。ネガティブな被養育経験を持つ母親 12 名のインタビューデータを M-GTA にて質的分析を行い、30 の概念を生成し、9 つのカテゴリーに収束、結果図とストーリーラインで示した（以下、概念は〈 〉、カテゴリーは【 】）。幼少期の不適切な養育に対して、子どもは過剰適応し、心身の発達を阻害されるばかりではなく、〈自己肯定感の低さ〉〈人に頼れない〉など、【自分の人格形成への影響】が示された。また、ネガティブな被養育経験を持つ母親の子育てへの方略は、〈反面教師〉〈頭で考える子育て〉であり、過剰適応による“偽りの自己”（Winnicott, 1965）の防衛である知性化が作用していることが示唆された。さらに、負の世代間連鎖の克服への要因として、自分の被養育経験を整理して語れる内省力、〈両親以外の重要他者の存在〉〈専門家への相談・社会的サポート〉が重要であることが示された。

研究 4 では、子どもの年齢変化に伴う母親の被養育経験の影響の変容プロセスを探索的に検討した。研究 3 の調査対象者で縦断調査に同意を得られた母親 8 名のインタビューデータを M-GTA にて分析、17 の概念が生成され、8 つのカテゴリーに収束、結果図とストーリーラインで示した。

【自分の人格形成への影響】による困難感は継続しており、〈反面教師への誓い〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉は変わらないものであった。子どもが言葉を発することにより〈フラッシュバック〉〈子育ての適切なモデルがない〉は軽減したが、【児童期の新たな不安】として、子どもとの関係性の難しさが出現することが示された。

研究 5 において、ネガティブな被養育経験を持つ母親のパーソナリティと介入について検討した。3 名の母親に対してロールシャハ・テストと SCT を実施、研究 3・研究 4 から得られた〈自己肯定感の低さ〉〈対人面の困難さ〉の傾向が、共通した特徴として検査結果からも読み取ることができた。また、そのうちの 1 名に対して継続的心理療法を実施、内省する機会を継続的に持つこと、人に支えられる経験をすることによって、子どもとの関係性への気づきがあり、継続的な介入によってネガティブな被養育経験の連鎖を抑制する可能性があることが示唆された。

研究 1 から研究 5 により、ネガティブな被養育経験を持つ母親の特徴と克服への心理プロセスが示された。ネガティブな被養育経験を持つ母親は、不安定な愛着スタイル、被害的認知の高さが特徴的であり、特有の困難感は質的分析の結果得られた概念によって構成され、『育児被害感情』と名付けられた。育児困難感を示す母親への支援については、困難感の背景要因を適切にアセスメントすることが重要である。背景にネガティブな被養育経験がある場合には、『育児被害感情』の発生機序と構造を理解し、母親の困難感に寄り添い、“真の自己”と向き合えるよう内省を促しながら子どもとの関係性をサポートする支援者の存在が必要であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、母親のネガティブな被養育経験が子育てに及ぼす影響について、克服へのプロセスに注目して検討し、ネガティブな被養育経験を持つ母親のアセスメントと支援の視点を明らかにすることを目的としたものである。ネガティブな被養育経験の世代間連鎖に着目し、世代間連鎖の生じている母親の特徴を量的に検討、さらに、ネガティブな被養育経験の克服への心理プロセ

スと要因を質的に検討している。虐待の世代間連鎖の研究を基盤にして、虐待とまではいかないが子どもが嫌悪感情を抱くような行為を含む不適切な養育を対象に検討することにより、潜在的虐待予備軍への支援にも役立つと考えられる。この問題意識は、筆者の実践現場から発したもので、子どもの発達をアセスメントする中で、子どもの発達に影響を及ぼす親の養育態度に注目、さらに、親の養育態度を規定する背景要因として、親自身の被養育経験に焦点化して検討された意欲的な研究であると言える。審査を通して認められた本研究のもつ成果と意義は以下の通りである。

1) ネガティブな被養育経験の世代間連鎖の特徴について、群分けによる検討、および、共分散構造分析によってモデル図を提示、連鎖のある母親の特徴と支援の視点を示した（研究1・2）。

虐待に限定しないネガティブな被養育経験の有無、世代間連鎖の有無によって母親を4つの群に分類、ネガティブな被養育経験のある母親はない母親より愛着スタイルの回避傾向が高く、世代間連鎖が生じている母親は、アンビバレント傾向、および、虐待心性の被害的認知が高い傾向にあることが示唆された。また、母親の不適切な養育態度には、ネガティブな被養育経験の影響による不安定な愛着スタイルと虐待心性がプロセス要因として影響を及ぼしていることが示された。ネガティブな被養育経験を持つ母親への支援として、不安定な愛着スタイル、虐待心性、特に被害的認知へのアプローチという視点が得られたことは意義があるものと考えられる。

2) ネガティブな被養育経験を持つ母親の克服への要因と心理プロセスを、子どもの年齢変化の視点も加えて提示した（研究3・4）。

ネガティブな被養育経験の世代間連鎖を克服する要因について検討、自分の被養育経験を整理して語れる内省力、〈両親以外の重要他者の存在〉〈専門家への相談・社会的サポート〉が重要であることが示された。ネガティブな被養育経験を持つ母親の克服への心理プロセスを検討、〈自己肯定感の低さ〉〈人に頼れない〉など、【自分の人格形成への影響】が示され、ネガティブな被養育経験を持つ母親特有の【子育ての辛さ】を〈反面教師〉〈頭で考える子育て〉によって克服しようとしているプロセスが示された。さらに、子どもが幼児期から児童期に成長したことにより、【自分の人格形成への影響】〈反面教師への誓い〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉は変わらないものであったが、子どもが言葉を発することにより〈フラッシュバック〉〈子育ての適切なモデルがない〉は軽減し、【児童期の新たな不安】として、子どもとの関係性の難しさが出現することが示された。ネガティブな被養育経験の子育てへの影響と克服の要因について、精神分析的かつ発達臨床的視点により考察し、ネガティブな被養育経験の克服への心理プロセスと子どもの年齢に応じた支援の視点が得られた意義は大きいと考えられる。

3) ネガティブな被養育経験を持つ母親特有の困難感を提示し、育児困難感の背景要因の適切なアセスメントと介入の視点が得られた（研究1・2・3・4・5）。

子育て支援の現場において、母親の受けてきた養育が子育てに影響を及ぼすことについて、臨床的には捉えられているものの、実証的に示されたものは多くはなく、本研究において、ネガティブな被養育経験の世代間連鎖に葛藤を抱える母親特有の困難感を『育児被害感情』と定義し、発生機序と構造を可視化したことは意義があると考えられる。今後の子育て支援において、母親の育児困難感の背景に潜むネガティブな被養育経験を見落とさず、愛着スタイル、虐待心性に着目するという視点、および、特有の困難感である『育児被害感情』の発生機序と構造を念頭におくことにより、育児困難感の背景要因の適切な見立てと、ニーズに合った援助を提供することに役立つ研究となっていると考えられる。

以上のように、本研究において、一般家庭の母親を対象とした質問紙調査に加え、子どもの発達経過による縦断インタビューの実施を中心に、丹念な研究がなされており、子育て支援の現場においても大きな示唆を与える研究であると判断された。審査委員会では、研究 1 から研究 5 までの流れとしてのまとまりのなさが指摘されたが、各研究はそれぞれを深めていくことで独立した研究に成り得るとも評価され、最終的には今後の課題として期待することとし、課程博士論文としては十分な要件を満たしていることが確認された。

以上により、審査委員会は本論文が博士（心理学）の授与に値するものと認めた。